

思考力・判断力・表現力を育む中学校社会科学学習指導 －協同学習と学習方略の活用を通して－

菊地 雄真¹⁾・山口 陽弘²⁾・石川 克博²⁾

1) 前橋市立第六中学校

2) 群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

To Increase the Students' Ability to Think, Reason, and Express Themselves Under Junior High-School Social Studies Learning Instruction: Through Cooperative Learning and Teaching Learning Strategies

Yuma KIKUCHI¹⁾, Akihiro YAMAGUCHI²⁾, Katsuhiko ISHIKAWA²⁾

1) Maebashi 6 Junior High School

2) Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

キーワード：中学校社会科、協同学習、学習方略、思考力

Keywords : Social Studies, Cooperative Learning, Learning Strategies, Ability to Think

(2017年8月31日受理)

1 問題

(1) 中学校社会科における課題

社会科にはどうしても「暗記」というイメージがつきまとう。第一著者自身、社会科を暗記教科としてとらえていた経験がある。教師として暗記に終わる授業ではなく教える意味のある授業をつくらうとしたことで、この課題に向かい合うことになった。暗記教科として学習意欲を失っている生徒の状況を改善し、さらに生徒が社会科特有の生きた知識を身に付け、それを活用できるための力を育成する授業実践を構築することは、中学校社会科における喫緊の課題である。

(2) 生徒の実態における課題

① **全国**「特定の課題に関する調査」(平成19年度 国立教育政策研究所)

複数の資料の中から必要な資料を選択し、情報を総合的に考察して、説明することが苦手であること、問題解決的な学習について取り組みにくいと感じている

ことが課題であることがわかる。

② **群馬県**「ぐんまの子ども基礎・基本習得状況調査」(平成25年度 群馬県教育委員会)

平均正答率が、全体は67%に対し、社会科は47%と全教科中最低であった。「〇〇(教科名)が好き」という質問について、全体は72%に対し、社会科は63%であった。否定的な回答をした生徒の多くがその理由として「覚えなくてはいけないことが多いから」と回答している。本県の生徒にも「社会科は暗記教科」という意識が強く定着しており、それが社会科における学習意欲低下の大きな要因であることがわかる。

③ **群馬県**「社会科アンケート調査」(平成28年5月実施)

社会科に関する学習観や学習の状況について問う独自のアンケート調査を第一著者の課題解決実習校の中学二年生計60名に実施した。アンケート結果より社会科の学習は「好きだ」「どちらかといえば好きだ」という生徒は約70%、「嫌い」「どちらかといえば嫌い」という生徒は約30%いる。理由として、それぞれ「暗

記が得意、覚えればテストの点数が取れる」や「覚えることが多い、暗記が苦手」という理由が多く目立つ。学習意欲の高い生徒でも社会科の学習が暗記に終始している傾向であることがわかる。

(3) 中学校学習指導要領解説 社会科編

社会科では、様々な資料を適切に収集し、活用して事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに、適切に表現する能力を育てるために、言語学習の充実にかかわる学習を積極的に計画・実施し、学習内容の工夫・改善を図ることが求められている。

2 本研究の手立て

指導にあたっては、学習指導要領や教科書を読み込んで教材研究を十分に行い、要点をつかむことが重要なことと考える。その上で、学習の目標を定め、単元を構造的にとらえることが必要だ。このことを前提条件として、以下の3つを本研究の手立てとする。

(1) 協同学習

互恵的な関係の中でともに高め合う関係があつてこそ、思考力・判断力・表現力等を育成することができる(佐藤, 2013)。そのために、協同学習は有効な手立てである。

導入の場面では、小グループでの予習説明活動を取り入れ、既習事項の確認や知識のベースづくりだけでなく、その後の授業全体に協同の雰囲気をもたせることが期待できる。課題を追究する場面では、主要資料について読み取ったことを小グループで説明し合う活動を取り入れ、課題に対する理解を深めさせる。まとめの前段階では、小グループでキーワード相互の関係を探して矢印でつなぐ活動を取り入れ、学習内容を整理させたり複数の視点に気付かせたりする。授業の最後には、課題について交流していく中で、クラス全体の協同により課題の解決につながったことを実感させる。また、自分の意見が仲間の役に立ち、仲間の意

<話し合いの基本ルール>

①発言は相手に聞こえる大きな声です。

②説明は「意見+理由」です。
例) 資料〇から～がわかります。このことから～と考えます。

③聞き手は、自分の考えと比較して聞いて要点をメモし、疑問に思うことがあれば質問する。

図1

見が自分の役に立つという学級風土づくりに向けて、小グループや全体での発言は相手を意識したものにし、聞き手はそれを傾聴するよう指導する(図1)。

(2) 学習方略の活用

社会科を暗記教科と認知しているがゆえに学び方を誤って獲得している生徒には、学習の効果を高めるために以下の4点を学習のコツとして指導する必要があると考えた。なお、授業にあたっては考え表現する時間を保障するためにワークシートを活用する。

① 予習の仕方

既習事項の確認やキーワードの把握が済んだ上で授業に臨ませる。授業ではキーワードをつなぎ、自分の考えを表現するものとし、社会科における暗記型の学習観からの脱却を図る。以下の2つを予習の約束とする。

- ・事前に本時のワークシートを配布し、既習事項は予習をして授業に臨ませる。ワークシートは、既習事項について、実線空欄部にキーワードを書いたり説明したりできるものを構成する。
- ・教師が教科書でキーワードの数を指定し、生徒はその数のキーワードを探しアンダーラインを引く。

② 教科書の使い方

教科書の資料が本文のどこに対応しているかがわかる印と、教科書の既習事項や今後学習する事項など関連する事柄が記載されるページ番号に着目させる。生徒がこのことを理解していると、予習や復習をする際に役立ち、学習内容を関連する資料や前後の内容との

『社会科 資料読み取りのコツ』

～写真・イラスト編～

①いつ?どこ?
②人に注目(持ち物・服装・動きや仕事・表情・工夫)
③ものに注目(色・形・大きさ)
④自然に注目(季節・天気・山や海、川などの様子)

～表・グラフ編～

<全体をつかむ>

①表題(タイトル)・年度・出典に注目
②縦軸・横軸に注目
③全体の変化に注目

<部分を見る>

④数値の大きい・小さいところに注目
⑤数値の変化が大きいところに注目

③④⑤
理由や変化の背景を
考える

～地図・分布図編～

①表題(タイトル)・年度・出典に注目
②色やマーク、記号に注目 → その地域に多い理由を考える
③距離に注目

図2

つながりの中でとらえられる。

③資料の読み取り方

社会科で扱う資料を写真・イラスト編、表・グラフ編、地図・分布図編に分類し、それぞれについて読み取りのコツを提示し、教科書や資料集の具体的な資料を通して指導をする（図2）。

④矢印の使い方

キーワードを獲得するに留まらず、それらをつないでいくための矢印の使い方を提示する（図3）。キーワードを矢印でつなぐことが課題に対する考えを表現する際の足がかりにもなる。

< 矢印の使い方 >

→	<p>「因果関係」を表す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・〇〇（原因）だから（によって）△△（結果）だ。 ・〇〇（原因）は△△（結果）に影響を与える。
⇨	<p>「前後・変化」を表す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔は～、今は～。 ・〇〇から△△に変化する。
↔	<p>「対比・対立」を表す</p> <p>例) 長所↔短所 メリット↔デメリット 賛成↔反対</p>

図3

(3) パフォーマンス課題作り

パフォーマンス課題は、リアルな文脈において、知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような課題である（西岡，2008）。知識・技能を活用する力を身に付けて、思考力・判断力・表現力を高めるためには欠かせない課題であると言える。パフォーマンス課題は、教科書の単元末でも設定されている課題だ。

単元末の課題は、教科書に設定されている単元末のパフォーマンス課題を単元の目標と照合・逆算しながら作り直す。これが単元を貫く学習課題にもなる。各単位時間の課題は、単元末の課題に向けたものにする。協同学習の手法や学習方略の指導を授業内で行い、生徒は仲間とキーワードをつなぎながらパフォーマンス課題に取り組む。

また、パフォーマンス課題とあわせてルーブリック（評価基準）を提示する。これによって、生徒は自己

の記述がめあてに沿っているか確認ができるようになり、教師はねらいと指導に則した評価と一定の評価基準に従った評価ができる。

3 本研究の仮説

協同学習と学習方略の手法によって、知識・技能の獲得に留まらず、それを活用し思考力・判断力・表現力を育むことができるであろう。また、社会科の学習観の転換や学習意欲の向上が期待できる。本研究を通して、「事象相互のつながりをとらえ、課題を解決できる生徒」の育成を目指す。本研究の研究構想図が図4である。

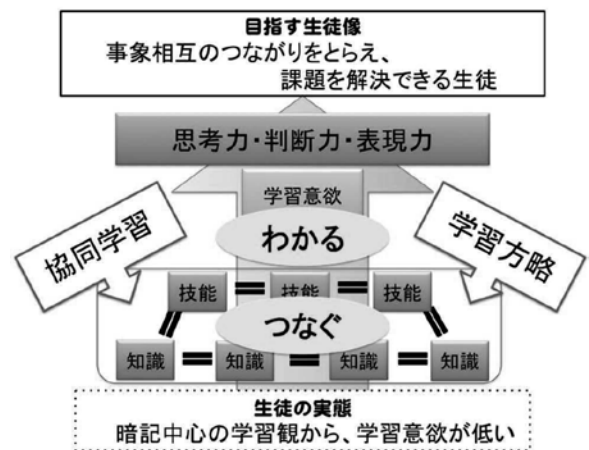


図4 研究構想図

4 授業実践

本実践は、平成28年度に群馬県内のB中学校2年生2クラスの計60名を対象として実施した。第一著者が教職大学院の解決実習を行った中学校である。実践の流れを表1に示す。

表1

月	5月	6月	7月	9月	10月	11月
単元	人口・産業の特色 日本の自然環境・ 地理 T1 5/16	江戸時代の成立 天保の改革 歴史 T1 6/10		開国と明治維新 歴史 T1 4/9	九州地方 地理 T1 5/5	中国・四国地方 地理 T1 4/4
	ねらいb 道徳	ねらいb 学級活動	T2		T1で計26時間 T2で計20時間	

(1) 道徳・学級活動における授業実践

道徳の授業実践では、生徒は協力することの大切さに気付き、今後の行動を考えることで、集団における

自分の役割と責任を自覚し集団生活の充実に努める意欲を高めた。

学級活動の授業実践では、各グループの代表者によるロールプレイによって望ましい会話の仕方について学んだ。また、司会者にシナリオを渡して、生徒たちで授業を進行した。

1学期のねらいは協同の良さを実感させ、協同学習に向けた基盤づくりを行った。

(2) 社会科における授業実践

道徳・学級活動における授業実践をつなげたのが社会科における授業実践である。社会科では、「個人→小グループ→個人→全体」の過程を協同で取り組ませた。最後には必ず個人に戻して説明をまとめ、全体に向けて発表させた。協同学習の中で、お互いの考えを表現したり共有したりすることができた。また、資料読み取りのコツや関係性をつなぐ矢印を課題解決に向けての足場として活用させた。

単元の実践例として、11月の実践（中国・四国地方～他地域との結びつきの視点を中心にして～）の流れを表2にまとめ、以下に紹介する。

表2

時期	単元名 のあて	主な学習活動
1	中国・四国地方はどのような地方だろうか 中国・四国地方の特色を追究する課題を設定しよう。	・学習地図を学校で完成 ・単元を貫く学習課題の設定
2	海運と陸運で結びつく工業 交通網の発達に着目して、中国・四国地方の工業の変化について説明しよう。	・資料を読み取り、課題追求を図る。 ・キーワードを矢印でつなぐ。 (個人→グループ)
3	高速道路で広がる結びつき 交通網の発達に着目して、中国・四国地方の農業と観光業の変化について説明しよう。	・本時のまとめを書き、発表する。
4	交通網の発達と地域の生活の変化 交通網の発達に着目して、中国・四国地方の生活や産業の変化について説明しよう。	・生活の変化について調べる。 ・グループでこれまでの学習内容を伝え合い、個人で単元末のパフォーマンス課題に取り組み、発表する。

単元末までに本地域の生活の変化と産業（工業・農業・観光業）の変化について学び、最後に生活と産業全ての視点を統合させて文章でまとめるというパフォーマンス課題（「交通網の発達により、中国・四国地方の生活や産業はどのように変化しているか説明しよう。」）に取り組ませた。生徒たちは、各単位時間でまとめの文を個人ごとに書き溜めておく。それらをもとに、生活・産業の視点ごとに説明活動を行ったり、各キーワードを矢印でつなぎ関連性を確認したりするなど協同学習の手法によって小グループで互いに教え合う。その後、小グループでの活動を個人ごとに文章化する。最後に、各個人がその文章を全体へ発表するという活動主体の授業であった。

(3) 授業実践における具体的な手立て

授業実践の具体的な手立ては、図5のように研究構想図に結びつく。

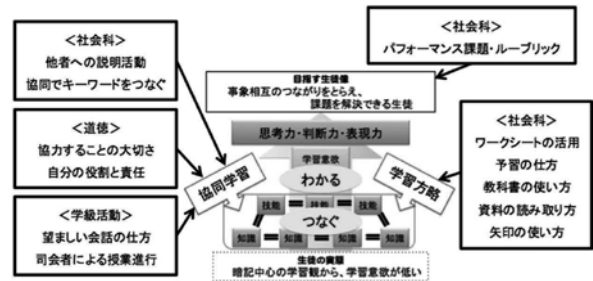


図5

5 効果検証

効果検証は配属学級の1クラス(31名)を対象に行った。

(1) アンケート結果から

社会科における学習観などについて、5月と11月の2回にわたりアンケート調査を実施した。アンケート結果を表3に示す。協同学習の有効性に生徒が気づき、さらには事象相互のつながりをとらえようとする生徒の姿が反映されたと言える。しかし、質問1と質問6では、「強くそう思う」と答える生徒は増えたものの、全体として伸び悩んだ。質問1の結果は、1年次と比べると学習内容が難しくなった上に、講義形式の授業に慣れきった生徒には数時間では活動的な授業への抵抗を払拭できなかったことが考えられる。また、質問6の結果は、資料読み取りのコツを理解し、以前よりも自分の学習を客観視するようになったがゆえに、評価が低くなったものと考えられる。

表3 アンケート結果

質問	内容	5月	11月	1	2	3	4
1	社会科の学習は、好きですか。	2 (6.5%)	7 (22.6%)	17 (54.8%)	18 (58.1%)	17 (54.8%)	5 (16.1%)
		2 (6.5%)	10 (32.3%)	11 (35.5%)	8 (25.8%)	11 (35.5%)	8 (25.8%)
2	友達同士で話し合うことは、社会科の学習に役立つと思いますか。	0 (0.0%)	6 (19.4%)	14 (45.2%)	11 (35.5%)	11 (35.5%)	11 (35.5%)
		1 (3.2%)	1 (3.2%)	11 (35.5%)	18 (58.0%)	18 (58.0%)	18 (58.0%)
3	あなたは、社会科の学習は、覚えることだけで問題を解くことができると思いますか。	9 (29.0%)	9 (29.0%)	12 (38.7%)	12 (38.7%)	12 (38.7%)	1 (3.2%)
		8 (25.8%)	12 (38.7%)	11 (35.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
4	あなたは、社会科の学習の際に、図や表にまとめて学習内容を整理していますか。	5 (16.1%)	13 (41.9%)	11 (35.5%)	11 (35.5%)	11 (35.5%)	2 (6.5%)
		3 (9.7%)	12 (38.7%)	12 (38.7%)	4 (12.9%)	4 (12.9%)	4 (12.9%)
5	社会科の学習では、習ったことどうしの関連をつかむようにすることが大切だ、と思いますか。	0 (0.0%)	5 (16.1%)	13 (41.9%)	13 (41.9%)	13 (41.9%)	13 (41.9%)
		0 (0.0%)	1 (3.2%)	12 (38.7%)	18 (58.0%)	18 (58.0%)	18 (58.0%)
6	あなたは、社会科の学習の際に、資料(グラフ・図・表・絵・地図など)を読み取るようにしていますか。	1 (3.2%)	3 (9.7%)	16 (51.6%)	11 (35.5%)	11 (35.5%)	11 (35.5%)
		1 (3.2%)	4 (12.9%)	13 (41.9%)	13 (41.9%)	13 (41.9%)	13 (41.9%)

※1 そう思わない 2 どちらかといえばそう思わない 3 どちらかといえばそう思う 4 そう思う

(2) パフォーマンス評価から

表4を見ると、6月から11月のパフォーマンス課題において、A評価の生徒が高まり続けたことがわかる。C評価の生徒が6月当初と比べ半減したことは、思考力・判断力・表現力の底上げの表れと言える。

表4 パフォーマンス評価の変容

月	6月	10月	11月
課題	貿易の振興から鎖国へ	九州地方	中国・四国地方
A	5人(16.1%) (5) (0) (8)	15人(48.4%) (11) (2) (2)	17人(54.8%) (2) (2) (2)
B	14人(45.2%) (3) (3) (2)	7人(22.6%) (2) (3) (4)	8人(25.8%) (2) (3) (4)
C	12人(38.7%) (2) (6)	9人(29.0%) (4) (1)	6人(19.4%) (4) (1)

(3) 単元テストの結果から

図6から以下2点に注目したい。1点目は7月単元テスト「江戸幕府の成立と鎖国」において基礎問題は77.4点と高得点に対し、発展問題は45.2点と伸び悩んだこと、2点目は発展問題の得点が10・11月では基礎問題と合わせてバランスよく伸び、さらには11月単元テスト「中国・四国地方」では発展問題の得点が基礎問題を上回ったことだ。このことから次のことが考えられる。つまり、教え込み型の授業は基礎的・基本的な知識・技能の習得に関して効果的だが、それを活用する段階になると対応ができない。一方、本研究で目指した生徒に考え表現させる授業の積み重ねにより、思考力・判断力・表現力は基礎的・基本的な知識・技能と合わせてバランスよく伸びたと考える。

図7を見ると、計3回の定期試験の観点別得点率の変容がわかる。筆者が出題範囲の3分の2を担当した11月の定期試験では、全観点の得点率が前回までの試

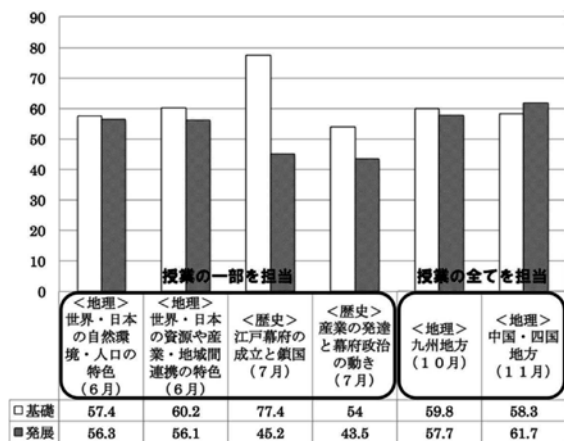


図6 単元テスト（業者テスト）観点別平均点

験結果を大幅に上回った。さらに、論述問題において1つでも空欄があった生徒は、10月の定期試験まで学級の半数以上いたが、11月では3名と論述問題を空欄で済ませてしまう生徒が激減した。

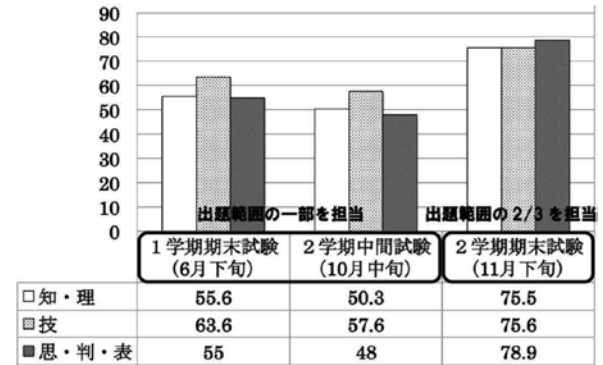


図7 定期試験観点別得点率 (%)

6 考察

(1) 成果

①学習方略の獲得・深化

アンケート結果から、多くの生徒が社会科はキーワードを獲得するだけでなく、仲間と協力しながらそれらの関連をつかむ必要性に気付けたことがわかる。また、5月当初では予習をする生徒は半数だったが、10月に入るとほとんどの生徒が予習をしてくるようになった。社会科の学習に臨む姿勢が変化し、学習方略が獲得・深化されたと言える。

②思考力・判断力・表現力の向上

実践を積み重ねていく中で、生徒は日々ルーブリックに沿って自分の考えを表現できるようになった。また、11月の定期試験で論述問題の無回答生徒が激減したこと（48.3ポイント減）、思考・判断・表現の観点で大きく得点率を伸ばしたこと（23.9ポイント増）は生徒の思考力・判断力・表現力が向上したことを裏付ける。本研究を通して身に付けさせたい力の育成に協同学習と学習方略の指導は効果的であったと考える。

③他教科・他領域との関係

社会科での協同学習は、道徳・学級活動における授業実践と並行することで実を結んだ。アンケート結果を見ても、生徒は社会科の授業の中でさらに話し合いの有効性を実感している。今後、協同学習の学びが他の場面でも生きていくことが期待できる。また、教師が指示しなくとも何かを端的にまとめる際に、因果関係の矢印を使う生徒が多くいた。今後、指導した学習

方略が他教科・他領域に転移していくと期待できる。

(2) 課題

ワークシートに不慣れな生徒や下位層の生徒にとっては、ワークシートへの記入に終始してしまう可能性に気付いた。ワークシートは知識獲得の段階においては有効だと思いが、そこから思考・判断・表現の段階にステップアップさせるためには、協同学習や学習方略の一工夫が必要であると考えた。ワークシートの穴埋めは手段であり、目的は文章をまとめて発表することであるということを、授業の最初に意識させたことが11月の実践(中国・四国地方)での成功の一因であった。今後、全ての社会科の授業でこれを意識化させていく必要がある。そのためには、年間を通じた計画的な取り組みが不可欠だ。

7 参考・引用文献

- 群馬県教育委員会 (2013) . ぐんま子どもの基礎・基本習得状況調査
- 池田玲子・館岡洋子 (2007) . ピア・ラーニング入門 - 創造的な学びのデザインのために - ひつじ書房
- ジョンソン, D.W.・ジョンソン, R.T.・ホルベック, E.J. 著 石田裕久・梅原巳代子 訳 (2010) . 学習の輪 - 学び合いの協同学習入門 - 二瓶社
- 国立教育政策研究所 (2007) . 特定の課題に関する調査 (社会) 調査結果 (小学校・中学校)
- 文部科学省 (2008) . 中学校学習指導要領解説 社会編 日本文

教出版

- 西岡加名恵 編著 (2008) . 『逆向き設計』で確かな学力を保障する 明治図書
- 佐藤浩一 編著 (2013) . 学習の支援と教育評価 - 理論と実践の協同 - 北大路書房
- 佐藤浩一 (2014) . 学習支援のツボ - 認知心理学者が教室で考えたこと - 北大路書房
- 静岡県総合教育センター (2012) . 静岡県の授業づくり指針 (社会科) 資料活用のポイント
http://www.center.shizuoka-c.ed.jp/shizuoka_guideline/02shakai/0204siryoukatuyou.pdf
- 杉江修治 (2011) . 協同学習入門 - 基本の理解と51の工夫 - ナカニシヤ出版
- 辰野千寿 (1997) . 学習方略の心理学 - 賢い学習者の育て方 - 図書文化
- 上田剛 (2015) . 知識や技能を活用する力を育む中学校社会科学習指導 - 「社会科カード」を取り入れたパフォーマンス課題を単元のまとめとして - H27年度群馬大学教職大学院課題研究論文
- 植阪友理 第7章 メタ認知・学習観・学習方略 市川伸一 編著 (2010) . 現代の認知心理学5 発達と学習 北大路書房

(本稿は、第一著者によるH28年度群馬大学教職大学院の課題研究論文の一部を抜粋し、加筆修正したものである。)

(きくち ゆうま・やまぐち あきひろ・いしかわ かつひろ)